

高科正信

五年四組 の 下力ダン



ポプラ社の創作文庫 23

いなくなったヤスコ

松井英子

ポプラ社 昭和51年 118p 22cm

N. D. C. 913



検印省略

いなくなったヤスコ

著者 松 井 英 子

昭和51年 6 月 再版©

発行者 久 保 田 忠 夫

発行所 株式会社 ポ プ ラ 社 〒160 東京都新宿区須賀町 5
振替 東京 149271

印刷所 新興印刷製本株式会社

製本所 富士製本株式会社

落丁・乱丁本はいつでもおとりかえます

8093—005023—7764

五年四組のイカダ



高科正信

まえがき

ぼくが小学校一年生のときのことでした。

なにが原因げんいんだったのか、いまではよく思い出せませんが、ぼくはけんかをしました。相手の子が泣なきました。担任の教師はぼくだけを叱しかりました。理由はどうかあろうと——もっとも、その教師は理由を聞こうとさえしませんでした——手を出す者が悪いというのです。ただ、謝あやまりなさいというのです。

謝あやまりなさいといわれて「ごめんなさい」をいわされることほど、子どもにとって屈辱くつじよく的なことはありません。認める必要のない「罪つみ」を無理矢理認めさせられるのですから。

ぼくはぎゅっと口を結びました。いつまでたっても「ごめんなさい」といいませんでした。自分の手に負えなくなったその教師は、とうとう、ぼくを校長室に連れて行きました。

「ほんまに強情な子や。アンタのような子は校長先生に叱ってもらいます」というわけです。極悪非道の罪人をい、おっぴく、といったところでしょうか。

わずか一年生の子どもに、この教師は取り返しをつかないほど、ひどい拷問ごうもんを科かしました。それでもぼくは口をひらきませんでした。

母が呼び出されました。当時（二十六年たったいまもそうですが）、母は生きていくために必要なお金を手にするため、働いていました。学校に呼び出されるとくらしにひびきます。母のいる前で、ぼくは、その教師や校長から、自分の否を認めない末恐ろしい子だといわれました。

「この子は素直な子です。それに、自分から先に手を出すような子ではありません。きっと理由わけがあると思います。理由を聞いてやってください」

いつも働いていて学校のできごとは、学校にまかせるといった母でしたが、このときばかりは必死にぼくをかばいました。

間に入る母に対して、教師は決定的ともいえることばをあびせかけます。

「家庭が貧^{ます}しくて、母親が家にいない子どもは素直に育ちませんよ。それに、〇〇くんはケガをして泣^ないています。たいしたケガじゃなかったからいいようなものの、校長先生や〇〇くんのお父さんになんとおわびしていいやら」

その父親というのは、PTAの役員をしている地域の有力者でした。

一生許せない——この話をするたびに、いまでも、母はくやし涙^{なみだ}を浮かべます。

子どもにとって、小学校一年生ではじめて出会う先生は、いつまでも印象深いものです。子どもの成長にとって、大きな位置を占^しめる存在です。それなのに、ぼくにとってのその教師は、不幸そのものでした。

ぼくは小学校を五回かわりました。転校するたびに、ぼくはともだちを失いました。ともだちができず、つらい思いをしました。そして、表面的なふるまいで人の目をひき、自分の心の内を他人^{ひと}に見せることを決してしない道化師^{ピエロ}になることを、ぼくは少年期に身につけてしまっていました。

ぼくは、子どもにとってひとつの学校に六年間いることがしあわせで、いくつもの学校を

渡ることがふしあわせだとは思いません。かなしみをものともせず生きていくことのできるのが子どもだ、と思っっているからです。しかしながら、そのかなしみが心の奥深く沈しずんでしまうこともまた事実だほんとうと思います。

小学校六年間のあいだに、ぼくは心の底からわかり合えるともだちにも、ぼくのことをわかってくれる先生にも出会うことができませんでした。また、さまざまな人生を背負せおってひとつの教室に集まってくるともだちのことを知ろうともしませんでした。

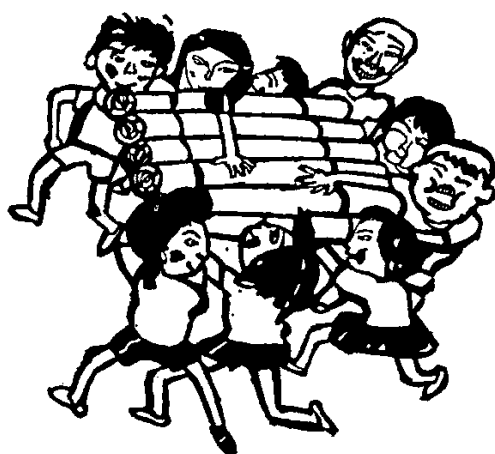
この本に登場する子どもたちと出会うことによって、ぼくは人と人とのようにしてわかり合い、支え合うことができればいいのかを改めて考えることができました。

ひょっとすると、あなたのとなりの席にすわっているともだちは、石本章いしもとあきらくんかもしれない。川田正三かわだせいぞうくんかもしれない。唐沢憲一からさわけんいちくんや米田恵子よねだけいこさん、中川京子なかがわきょうこさんが重たい荷物を背負せおっていることに、あなたは気がついていないだけかもしれません。

あなたがこの本を読むことによって、あなたのとなりにいるともだちと、いま一度出会うことを願っています。

もくじ

心てなんですか.....	9
ノン.....	57
ほんまの人間.....	103
荷物とイカダ.....	151



装幀 福島 博

装画 島野千鶴子

心てなんですか



1 こんどの先生も同じやろか：

ざわめいていた教室が、一瞬、水を打ったように静かになりました。

五月四組を担当することになった明部あけべ司郎先生が、教室に入ってきたからです。

机やいすが床にこすれ合い、クラス替えになったばかりの子どもたちは、思い思いの席に着きました。

教室は、ぴんと糸を張りつめたような空気につつまれました。

どの顔も、新しい担任の先生がどんな先生なのか、第一声だいいっせいに耳をかたむけようと息をのんでいます。

石本章いしもとあきらは、いちばんうしろの席で背すじを伸ばし、まっすぐに明部先生を見つめていました。

今度の先生は、ぼくのことを大事にしてくれる先生やろうか、それとも、やっぱりぼくを

ひねくれた子ども、手に負えない子どもとしてしか見てくれへん先生やろうか。五年生もいままでと同じようにいじめられるのやろうか……。

そんなことを考えながら明部先生を見ていると、章の頭の中を、入学式の日のできごとが走馬燈そうまだうのようにかけめぐっていきました。

「外人がいじんや、外人がいじんがおる！」

小学校の門を生まれてはじめてくぐった入学式の日、章は知らない男の子に指をさされました。

はじめは自分のことをいわれているのだとは思いませんでした。けれど、珍しいものでも見るような目つきで指さされ、「外人がいじん」といわれているのは自分のことなんだと感じるまでに、そう長くはかかりませんでした。

なぜ、自分が「外人がいじん」といわれなければならないのかはわかりませんでした。が、とてもいやなひびきをもついわれかたであることだけは、六歳の章にも感じとれました。

式のあいだ中、「外人^{がいじん}」といって指さされたことが、章^{あきら}の頭からはなれませんでした。壇上^{だんじょう}でお祝い^{いっわい}のことばを述べる校長先生の顔は見えませんでした、担任の先生がどの先生でなんという名前かもわかりませんでした。新しく二年生になった人たちのお祝いの歌も聞こえませんでした。

章は、お父さんが新調^{しんちよう}してくれた明るいグレイのブレザーのすそをにぎりしめて、まっ白の上ぐつばかりを見つめていました。

遠い、知らない世界に放りこまれたようでした。

学校からの帰り道、章の手を引きながら、お母さんがいいました。

「おめでとう、章。ともだちをたくさんつくるんだよ。それから、一年生になったんだから、これからはなんでもひとりでできるようにならなくちゃいけないねえ」

お母さんのことばには答えずに、章はうつむいたまま歩きつづけました。

家までの道のりがやけに長く感じられました。

「ぼく、きょうから一年生なんやね。学校は楽しいところかなあ。ともだちはできるかなあ。

勉強はむずかしくないかなあ」

そういつて家を出た章の心は、いま、鉛なまりのように重くなっていました。

章は、鏡台きょうたいの前にこしをおろすと、鏡の中の自分をぼんやりとながめました。自分は「外人じん」と呼ばれるようなすがた、かたちをしているのでしょうか。

あざけるように指さした男の子と自分とは、いったいどこがちがうのでしょうか。

鏡の中にいる章は、はだの色がすきとおるように白く、髪と瞳ひとみは黄金こがねに近い茶色をしていました。顔はほっそりとして、あごがとがっていました。

「お母さん、ぼくの顔おかしい？」

章は真剣しんけんな顔をしてたずねました。

「おかしいって、顔になにかついてでもいるの」

着物の帯おびをほどきながら、お母さんがいいました。

「ぼく、学校でガイジンっていわれたんや。ぼくはお母さんの子どもやろ」

章はお母さんにつめ寄りよりました。

「^{あきら}章はお母さんがおなかをいためて生んだ子どもだよ。心配せんでもいいよ。さ、早く着かえて遊びにいったいで」

「学校へいきたくない。また、ガイジンっていわれるもん」

「気にすることなんかないよ。さ、いったいで」

「いやや。指さされて、へんな目で見られるもん」

お母さんは困^{こま}ってしまいましたが、小さい子にいいふくめるように、おだやかに話しかけました。

「いいかい。学校というところはね、みんながいくところなんだよ。ともだちをつくったり、勉強をしたりするところなんだよ。章も一年生になったんやから、毎日学校へ行って、かしこい子どもになるんだよ」

「もう、いいよ」

章はお母さんに背を向けると、ベランダへ出ていきました。

「ぼくは学校へいかへんからね。ガイジンとちがうからね」

